海人の母子
母のアワビの中に
出入りする
息子のウツボ
静かな夜の秘密の営み

南の端に、年がら年中漁業が盛んな港がある。
冬には金目鯛や牡蠣（かき）、夏には穴子や間八（かんぱち）といったように季節によって採れる海の幸が変わり、その数も多い。近くの街を中心に、多くの出荷数を誇っている。

そんな港町の一角に、海女の母親と漁夫の息子が二人で暮らしている家がある・・・。

「おっかぁ！！今日もたくさん獲れたよ！！ほらぁ！！」
息子の涼太（りょうた）がこの日も大量に採れた魚が入った魚籠（ビク）を肩からぶら下げて帰ってきた。
「帰ってきたかい涼太！母さんも少し前に帰ってきたんだ。今日は何が獲れただい？？」
母親の洋子（ようこ）が息子の大漁を喜ぶ。
「鱧（はも）がたくさんと鮑（あわび）だ！！あとでっかいタコが一匹採れただ！」
この親子は現在、二人で漁業を営み生活を切り盛りしている。
大きな業者のように大きな船で大掛かりな漁に出ているわけではないが、自営漁業用の小さな漁船で、そして時には銛（もり）や磯ノミを持って海に潜って漁をし、自分たちが食する分を持ち帰る。そして多く獲れた分は競りに出して生活の足しにしているのだ。

「ほんとうだ涼太！今日も大量だのぉ！！」
ここ最近は潮の流れが良く、釣果が良い日が多い。大漁を二人で喜び合っている日が続いている。
「このままいけばウチは億万長者だのぉ！！」
「ははは！！ほんとだほんとだっ！！」
母子二人だけで生活する小さなおんぼろ一軒家だが、寂しい雰囲気などが漂うことはなくいつもこの調子で明るい。特にここ最近のように漁の調子が良いとなおさらだ。

そして・・・・・。
この漁家がいつも明るく母子の仲が良いのにはもう一つ大きな理由があった。

「よし！！じゃあそろそろ始めようかぁ！今日も二人して漁に精を出したご褒美の時間だ！！」
「俺にとってもおっかぁにとっても“ご褒美”だね！！」
「そうさ！そうとも！！」
そんな会話をしながら二人は・・・・・なんと着ている服を脱いでいるではないかっっ！！
「それにしても涼太！おまえのオチンポは大きくなったねぇ！」
水に濡れた漁用合羽（りょうようかっぱ）を脱ぎ、丸出しになった涼太の下半身を見て洋子が嬉しそうに呟く。
「おっかぁが毎日愛してくれて大事にしてくれているからさ！！ほら、いつものように舐めてくれよ！！」
隣家からは１００メートル以上離れた、港の中でも辺鄙な場所にあるこの家。言うまでもなく日が暮れたこの時間帯にもなれば、たとえ大声を出そうとも誰も何も気づかない。
二人は狭い寝室に移動し、慣れた様子であっという間に素っ裸になった。
「さぁ、これでいっつもみたいに楽しめるね、おっかぁ」
至福の表情で涼太は洋子に微笑む。
「涼太は本当にこの時が一番嬉しそうだねぇ？」
「そりゃそうさっ。この時のために日なか漁を頑張ってるんだから！」
「そうだねぇ、いいことだ涼太。じゃあ・・・そんな頑張り屋さんの涼太に母さんのアワビを舐めてもらおうか・・・・んっ、ほら・・・・ここに顔を埋めてほら・・・」
そう言って洋子は布団の上で仰向けになり、涼太に股を広げて見せた。
「あはぁぁぁ・・・・おっかぁのアワビ・・・とってもきれいで濡れてて・・・とっても美味しそうだぁ・・・ンク・・ゴクリ・・・」

「遠慮せずにたんと食べて頂戴ね・・・・涼太・・あぁん」

「ンチュ・・・ジュブブブ・・ンクブチュバァァ・・・・やっぱりおっかぁのアワビが一番おいしいよ・・・ンジュブブブブチュプププ・・・海で採れるどのアワビよりも・・・レロレロレロレロ」

「そう言ってくれると・・・母さん嬉し・・・・あはぁん！！すごいぃっ！！やっぱり上手くなってるぅぅ！！凄いだぁ涼太！！」

可愛い可愛い息子の涼太に自分の陰部を愛撫され、快楽に悶え喘ぐ洋子。

そして世界中の他の何よりも愛おしそうに、夢中で自らの股間を貪り舐める涼太を見つめている。

涼太は洋子にとって一緒にこの家で生活するパートナーであり、そして漁家であるこの家の跡継ぎであり、そしてこうして褥を共にする夜の大切な相手でもあるのだ。

夢中でジュブジュブに濡れた割れ目を舐めまわす可愛い息子。

洋子は涼太があまりに可愛すぎて、我慢が出来なくなって起き上がって涼太を抱きしめる。

「あなたが愛おしすぎて・・・もう母さんダメになりそうなくらいよ・・・」

日々の海の仕事で鍛え上げられた洋子と涼太の肉体が密着する。

まだあどけない成長期でありながら涼太の胸板は厚く固い。

しかし洋子の胸部にはどう頑張っても鍛えられない大きな二つの柔らかい房（ふさ）がついている。その形状はまるで大きなタコの頭のようだ。

洋子は涼太の後頭部に両手を回し、ギュッと顔をその房に埋めてやった。

「おまえだけが・・・・母さんの支えなんだからね・・・・」

「うん・・・おっかぁ・・・・・」

穏やかで濃密な二人だけの時間が流れる。

「ン・・・・ンチュ・・・ンクチュチュプププ・・・・」

洋子に言われたわけでもないのに、涼太は自主的に、ほっぺにひっつ

いていた乳房の先っぽを唇に含みなおしてそのまま吸いついた。

「ンチュパチュプパプ・・・・・・」

小麦色に焼けた洋子の大きくて柔らかい房からは、白い養分がどんどん出てくる。

「毎日採れたてのお魚食べてるから、お乳もたくさん出るわ。んっ！んっ！・・・あぁん、全部涼太のためのお乳よ・・・・」

「ンクンクンクンク・・・・おっかぁ美味しいよ・・・・チュププチュパチュパ・・・ンクチュパ」

何よりの安らぎ。広大な青い海にも勝る限りない母なる柔らかさと温かさに包まれ、美味しい乳を思う存分吸い取る涼太。

「ンチュクチュププ・・・・ペロペロペロ」

涼太の下半身には、アワビへの愛撫と授乳によって最大限に興奮し勃起した肉棒が動いていた。

「ほらっ！！今度はおっかぁが俺のを食べてくれる番だよ！！」

そう言って、涼太はビンビンに勃起したペニスを洋子の眼前に差し出した。

「あぁぁっ！！あなたのオチンポすごく愛おしいだ・・・母さん本当に幸せ者よ、こぉんなに大きくなった涼太のを食べられて・・・今日もいつになく新鮮でビンビンねっ」

## ーーー体験版はここまでですーーー